

## D-2 原発性 AL アミロイドーシスに対する自家末梢血幹細胞移植の治療成績

○三木浩和<sup>1</sup>、尾崎修治<sup>1,2</sup>、賀川久美子<sup>1</sup>、竹内恭子<sup>1</sup>、原田武志<sup>1</sup>、中村信元<sup>1</sup>、  
中野綾子<sup>1</sup>、矢田健一郎<sup>1</sup>、安倍正博<sup>1</sup>、松本俊夫<sup>1</sup>  
徳島大学大学院 生体情報内科学<sup>1</sup>、 徳島大学病院 輸血部<sup>2</sup>

【背景】原発性 AL アミロイドーシスは難治進行性疾患であり、未だに有効な治療法が確立されていない。今回、本疾患に対し自家末梢血幹細胞移植を行い、その有効性と安全性につき後方視的に検討した。【対象】病理組織学的に原発性 AL アミロイドーシスと診断された男性 3 例、女性 1 例。年齢 31-63 (平均 51.5) 歳。M 蛋白型は、IgG- $\kappa$  1 例、IgG- $\lambda$  1 例、IgA- $\lambda$  1 例、BJP- $\kappa$  1 例。臓器病変は、心臓 3 例、腎臓 3 例、肝臓 1 例、消化管 1 例であった。移植前の寛解導入療法として、1 例に VAD を施行した。幹細胞採取は etoposide (200 mg/m<sup>2</sup> x 3 days)+ G-CSF, また移植前処置は L-PAM (70 mg/m<sup>2</sup> x 2 days) で行った。【結果】移植 CD34 陽性細胞数は 5.3-16.1 $\times 10^6$ /kg (平均 9.8 $\times 10^6$ /kg) であり、全例が生着した。移植後 2 例に免疫電気泳動による M 蛋白の消失がみられた。治療関連の有害事象としては、腎障害 (grade3) 1 例、肝障害 (grade2) 1 例を認めたが、いずれも一過性であった。移植後の観察期間は 29-66 か月 (平均 40.3 か月) であり、肺癌で死亡した 1 例を除く 3 例が現在も生存中である。心アミロイドーシスの合併を認めた 3 例では、いずれも移植後に左心機能の改善ならびに血清 BNP の低下を認めた。【結論】臓器障害を呈する原発性 AL アミロイドーシスに対して、自家末梢血幹細胞移植は有効な治療法である。